

教育独自の目標を立てた福沢諭吉の教育論

—元木健・田中萬年 編著『非「教育」の論理—「働くための学習」の課題』、
田中萬年「非教育の論理—「教育」の誕生・利用と国民の誤解」を中心に—

齋藤健次郎 (宇都宮文星短期大学)

1. 非教育の提案

私は、「非教育」とは、教育において生活を重視し、内発的な学習意欲を基盤とし、教え込みの教育を排除しようという主張であると受け取っている。その主張は、教育において発達を重視すること、教育方法の革新や地域社会教育を推進すること等を含んでいる。教育に対する非教育という対立的な言葉を使っているが、さほど輪郭の鮮明な概念ではないと思う。教育は、社会のあらゆる問題の影響を受け、絶えず変化して行く。それは、国家権力でさえも押し止めることはできない。そのために、教育には絶えず循環現象が現れる。それを防ぐことは、非教育においても不可能である。

2. 福沢諭吉の主張 (発達の人生観)

福沢諭吉は、教育という言葉に反対し、発育、発達という言葉を使うべきだと主張した人物として有名である。明治十年代に迫り来る教育の危機を感じて、教育の名称変更を考えたものと思われるが、その真意は何だったのだろうか。

私には元木先生、田中先生の「非教育の論理」について論評することを求められているが、この主張が近代教育の発足時の問題でもあり、また、その完成時の問題でもあることをどう見るかという事に引っかかり、福沢の教育論に遡ることになった。そして、非教育の主張に自分なりの判断を持つことができた。

福沢は、明治13年3月に「教育論」という小さな論文を、学士会院の発行する雑誌に掲載したが、その中に従来の教育という社会的な活動の内容に、人間の発達を取り入れて、「発達の教育」として捉え直し、教育に新しい目標を与えることを主張したのである。

この論文は、福沢が2年以上の準備があって、発表されたのであるが、まず、最初は、学士会院の創設である。その次が自ら学士会院の会長として運営に当たり、会院の任務を「教育の事を議し、學術技芸を討論する所たり。全国教育の針路を指点するを以て骨子となす。」と決定し、準備万端整って、教育論を執筆、掲載したのである。

3. 私立学校問題 (政府による教育破壊)

このように書けば、福沢は、当時順風満帆と思いがちだが、実は、慶応義塾は、入学生の急減で学校が経営の危機を迎えていた。それは、明治十年の西南戦争が鹿児島島の私学校の生徒の反乱によって勃発したこと、政府が戦費調達のために取

った経済政策の失敗のために貨幣価値の暴落、物価騰貴が起きて、私立学校に行く者が居なくなるような状態となった。私立学校は、戦争の起爆剤のように見られて、さすがの福沢も何か手を打たなければならない窮地に陥っていた。福沢は、考える。戦争は、政府を構成するメンバーの間の対立から生じたものだ。その中には兄弟で敵味方になった人物もいる。このような私的な対立で戦争を起し、国民に迷惑を掛けたので、政府は、無利子で金を貸すべきである。政府は、慶応義塾に25万円を貸せと、西郷従道文部卿を介して政府に申し出たのである。この損害賠償の考えが強かった分、その感情が教育論に反映していると私は考える。

4. 教育論の内容 (発達の精神)

教育論の内容は次のようであった。

「教育の目的は人生を発達して極度に導くに在り。其これを導くは何の爲にするやと尋ねれば、人類をして至大の幸福を得せしめんが爲なり。其至大の幸福とは何ぞや。ここに文字の義を細かに論ぜずして、民間普通の語を用いば、天下泰平家内安全即ち是なり。今この語の二字を取って仮に之を平安の主義と名付く。……即ち教育の目的は平安に在りと云うも、世界人類の社会に通行して妨げあることなかるべし。」(石河幹明著「福沢諭吉伝」昭和7年3月 岩波書店発行 第2巻 p.753)

このように庶民の視線で教育の目的を功利主義的に解説したのである。彼は、教育が庶民の願いや希望からスタートしたとしても、その願いや期待は次第に社会化され、物理的な欲望は、精神的な満足に置き換えられて行くと、信じているのである。「人生の発達その全きを得て、形体の安楽に兼ねて精神の愉快を重んずるの日に至り、始めて人類至大の幸福を見るべきなり。」と述べ、「形体」から「精神」への変化こそが発達の中身だと断言するのである。彼は、江戸時代の藩校の教育と明治の学校との連続面を捉えており、人間形成を重視した教育は発達の教育を近代的な社会に適合するものに向かわせる可能性があったと見ることができる。

江戸時代の教育と明治の教育の接点がわからないので、ハッキリしたことはいえないが、明治の初期にアメリカの産業教育の振興策を取り入れていたこと、それに答えるように中等社会論が各地に発生したこと、その段階で北陸地方に急激に広がった女紅場の教育があったこと、明治5年から始まる富岡製糸場の教育が成果を上げたこと、その影響を受けた

製糸業が発展したこと等の結果としては、日本を短時日の内に「蚕業国家」に作り変えられたのであって、女工哀史を産む前に、教育が「平安の主義」と結びつく可能性が、たとえ短い期間であっても、存在し得たのかもしれない。「平安の主義」が現実から浮き上がった提案でなかったとすれば、上の様な想像が湧いてくるのである。

5. 日本式の子育て（発達の教育）

発達の教育論は、教育において内発的動機を重視する。しかし、現実の学校教育は様子が違うと言われる。これは、教育文化の問題である。日本においては、母子関係においても、幼児教育においても、また、小学校教育においても、日本と外国とは、大きく異なっている。

第二次大戦後、日本の教育の根本である母子関係と、幼児教育、小学校教育への影響を調べた「日米母子研究」という比較教育研究が纏められたことがあった。この本から得られた教訓は、教育というものは、民族や地域の文化と深く結びついていて、簡単に操作できないということである。日本とアメリカでは、子育てが極端に言えば正反対であるというのである。アメリカの子供は、「自主的選好性」を尊重する授業に最も良く適合する。それに対して、日本の子供は、「受動的勤勉性」を発揮するような授業に最も良く適合するという。内発的動機を重視する教育は、アメリカの学校において成果の上がるものである。ところで、日本で重視されている「受動的勤勉性」とは母子、あるいは親子の緊密な人間関係のもとに成立するものである。

日本の場合、学習に影響を与える母子関係は、小学校上級学年まで継続されるのが普通である。それに対して、アメリカでは、学習に影響を与える母子関係は、小学校入学までで、小学生になると、母子関係は一挙に「疎遠」になってしまう。この違いが日米の差異を産むのである。以上のことからすれば、日米の母子の接触の比は、大雑把に言えば2対1となる。2対1の割合の内容は複雑であるが、日本の場合、父と母の役割分担があり、効率的であるという。そのために、親のために努力するという「受動的勤勉性」が学習エネルギーとして働くという。アメリカにおいて「興味」が占める位置を、日本においては「務めの意識」が働いているということになる。これが発達の教育の実態である。日本は既に十分実行していると思う。

5. 学校の任務（発達の生活指導）

では、学校は、どういう状態であるか、小学校を例として考えてみよう。アメリカの倍の母のエネルギーが子供に集中しているのだから、子供を迎える小学校も大変である。小学校では、勉強も大切であるが、しつけも大切である。既に幼稚園の段階から、日本の子供は、時間をかけて、深く子供の心情を掴んで育てていると言ってよい。日本は、既に十分に「発達の教育の先進国」なのである。日本の学校は、オールラウンドの優秀さが求められている。特定の専門分野に興味偏向していたり、先生に活発に質問したりする子供は授業

の妨げになるので、歓迎されない。出来る生徒は、授業で発言すべき段階になったら、行き届いた答えを出す。それは、演劇のようなものである。こういう授業に乗れない帰国子女は、一般的には歓迎されない。建前は質問歓迎の筈だが、彼等は、自分達が歓迎されないことを知って、日本の教育文化の複雑さを思い知るのである。

日本の社会は、一つの大きな役割社会を構成しているようなものがある。そこでは、子供も教師も役割社会の一員として嬉々として役割を果たすことに満足しているようである。外国の研究者が日本の小学校で教えられる役割教育の種類を調査して、それが外国の小学校の7倍に達することを発表している。掃除当番、給食当番、黒板消し、教材配布、ゴミ捨て、飼育小動物の世話等である。日本の教育は役割教育を研究し、実践させて居るである。すでにやるべきことはやっているのだ。

福沢諭吉は、教育のみが人間に与えることのできる目標を、学習する子供に与えようとした。その考えは「市民社会」を作るという開放的なものであった。教育の目的とと言えば、伝統文化との整合性に苦しみ、堅苦しい文章と決まったようなものだが、それを打ち破った内容は、素晴らしいの一語につきる。発達の教育論にうるさい注文を押しつけないで、福沢流の人間を解放する教育を目指せば、日本教育のおおきな欠陥と言われる「いじめ」を解消することが出来るかもしれない。

なお、元木健・田中萬年 編著『非「教育」の論理 - 「働くための学習」の課題』の内容構成は、次の通りである。

序	本書の意味するもの	(元木健)
第一章	非教育の論理 —— 「教育」の誕生・利用と国民の誤解	(田中萬年)
第二章	非教育の可能性 —— 教育を脱構築する	(里見実)
第三章	マンパワー政策と非教育	(木下順)
第四章	「平和的福祉国家」と人間開発 —— 教育の限界性の検討	(金子勝)
第五章	戦争と平和をめぐる教育と非教育の弁証法	(山田正行)
第六章	教育概念と教育改革 —— 労働と学習の結合の問題	(宮坂広作)
第七章	ドイツ教育学における一般陶冶と職業陶冶の関係 —— 新人文主義教育を中心に	(佐々木英一)
第八章	職人の能力形成論 —— その予備的考察	(渡邊顕治)
第九章	管理された労働 —— 企業内における技能形成のための教育訓練	(山崎昌甫)
対談	人間形成の根底と職業人育成のあり方とは	(元木健×田中萬年)
あとがき		
索引		

(明石書店、2009年12月、4/6判、348ページ、4,500円+税)